

平成 21 年度「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」

「共同利用型」の個人による研究—研究成果報告書—

森下 嘉之

申請者は本プログラムにおいて、「帝政期から戦間期におけるチェコスロヴァキア都市社会の変容過程」を課題に、平成 21 年 8 月 23-26 日及び 11 月 30 日・12 月 1 日にかけてスラブ研究センターを訪問した。申請者は現在、この課題をもとに博士論文の執筆に取り組んでおり（同年 12 月末に提出済み）、今回の訪問ではスラブ研究センター所蔵の文献を収集した。

申請者は、ハプスブルク帝国末期から戦間期におけるチェコ社会を、都市社会の変容過程から分析している。北海道大学図書館、及びスラブ研究センターは日本で数少ない、チェコ語の史料文献が豊富に揃っている研究センターである。近年の大学図書館相互のネットワークの発展で、文献そのものやコピーを取り寄せることも容易になったが、それでも、1 冊また 1 冊と出てくる文献や事典の類を取り寄せるのは効率的ではない。また、古い史料や貴重蔵書であれば禁帯出になっている場合もあり、一度は本腰を入れて現地で史料にあたってみる必要があると考えていたので、今回の援助は大変ありがたいものであった。

申請者は博士論文執筆の期限が迫っていたということもあって、それほどの長期滞在はかなわなかったが、出発前に予定していた文献の多くを現地で確認することができた。そのすべてを紹介することはかなわないが、具体的には、Karel Kuča, *Města a městečka v Čechách, na Moravě a ve Slezsku* 1-5 (『ボヘミア・モラヴィア・シレジアの都市と小都市 1-5 巻』), Praha: Libri, 1996-2002. (スラ研参考図書室所蔵) などがあげられる。他にも、今回の調査内容とは若干異なるが、1938 年以降の所謂「ズデーテン・ドイツ人」問題を扱った数多くのチェコ語及びドイツ語の研究書を確認した。

最後に、今回の渡航にあたっては、チェコ現代史をご専門とされておられるスラブ研究センターの林忠行先生の研究室を訪問させていただいた。ご多忙の中の訪問であったにもかかわらず、執筆中の論文に関してアドバイスをいただき、大変参考になった。また、文献の手配をいただいたスラブ研究センター図書室の方々にも、この場を借りて御礼申し上げます。